

抗日統一戦線期の梁実秋批判について

小 山 三 郎

- 一 問題の所在
- 二 抗日統一戦線下での梁実秋の主張のもつ意味
- 三 「抗戦無関係」論争とはなにか
- 四 結語

一 問題の所在

一九三八年十二月、梁実秋は重慶の『中央日報』副刊「平明」に「編者の話」を掲載し、主編としての立場から、原稿募集にかかわる幾つかの条件をのべた。

この「編者の話」には、その直後論争を引き起こす投稿に関する以下の条件が書かれていた。

いま抗戦がすべての物事の上に置かれているので、ペンをもつと抗戦を忘れることのできない人がいる。わたしの意見は少々違っており、抗戦に關係する題材をわれわれは最も歓迎するが、抗戦に無關係な題材でも、真に

流暢なものであれば、それもよい。無理に抗戦をその上に載せることはない。内容のない「抗戦八股」に至っては、だれにとっても有益でない⁽¹⁾。

さらに梁実秋は、『中央日報』社がわたしにひまがあるのをみて、副刊を編集させようとしているのだが、「わたしの交遊は広いものではなく」、「文壇上」だれが盟主であり、大将であるのか、さらに判然としない⁽²⁾」と述べたのである。

梁実秋のこの発言は、その直後、孔羅蓀、宋之的、張天翼らによって、およそつぎのように「反撃」された。

梁実秋は、今日の抗戦の偉大な力量の影響を抹殺し、今日の中国の抗戦という実際の存在を抹殺し、今日の全国の愛国的文芸界がともに努力している目標である抗戦の文芸を抹殺している。それに反してかれは人生のなかで抗戦と関係のない題材を探し、かれの読者に抗戦と関係のない文章を読ませ、抗戦という現実の闘争を忘れさせようとしている。梁実秋は、人々に「桃源郷の別天地」を探すように提唱しているのである⁽³⁾。

ここから始まる梁実秋と左翼作家の確執は、短期間ではあったが、中国現代文学史では一般に抗日戦争初期に文壇に発生した「抗戦無関係」論争と言われているものである。そして、この論争の後、梁実秋は一方的に「反動的」文人と断定され、文化大革命後に至るまで、中国現代文学史でおおむね以下のように解釈されてきたのである。

一九三八年末、国内外の形勢に顕著な変化が生じ、国民党は抗日に消極的になり、積極的に反共姿勢を暴露しはじめた。これら妥協投降的な危険性は、文芸戦線にも反映し一陣の反動的思潮が出現し、国民党御用学者と資産階級文人が文芸は抗戦に服務すべきか、の根本的問題をめぐり革命文学運動に新たな進攻を發動したのである⁽⁴⁾。

この見解は、一九三八年から四二年に文壇に出現した「反動的論調」の代表的なものが梁実秋の「抗戦無関係論」であり、それは人民の精神上の武装を解除しようと妄想し、反共と投降のための世論を準備しようとしたと

のべたものである。そしてこうした「誤った論調」は、左翼作家連盟の時代の「新月派」や「第三種人」の言論の焼直しであり、かれらは「公式主義反対を名目として掲げているが、意図するものは革命の政治に服務する文芸に反対し、進歩的抗戦文芸を否定した⁽⁵⁾」と結論したのである。

近年、このような梁実秋評価に大きな変化が生じてきている。その起点は、一九八〇年にパリで開催された抗戦文芸学術討論会と翌八一年に香港で開催された中国現代文学研討会であった。そこでの議論には梁実秋を批判したものは、「政客」であり、その批判は「不公平な認識⁽⁶⁾」によるものであり、「梁実秋は中国第一級の散文家で、しかるべき歴史的地位が与えられるべきである」との見解が出現していたのである。それゆえ、「抗戦無関係論」に関しても梁実秋が「民国二十八年から書き始めた『抗戦と無関係』な散文は、神経の張り詰めていた日々に一服の安らぎを与えるものであり、これがどうして「抗戦と無関係」なのか、という問いかけ⁽⁷⁾になつていた。また梁実秋に貼られた「反動文人」「資産階級の走狗」というレッテルは、「梁氏の一貫した反共的立場と関係し、かつての魯迅との論争と関係して⁽⁸⁾」いて、魯迅の神格化が崩れない限り、梁実秋の発言は「漢奸の言論」と解釈され続ける⁽⁸⁾と結論されたのである。

以上のこれまでの「抗戦無関係論」解釈に向けた疑義は、香港、台湾から会議に出席した人々が提出したものであったが、それ以降中国国内でも以下のような解釈が出されるに至ったことは注目に値しよう。

この論争は、実際には魯迅と梁実秋の二、三十年代の論争の継続であり、かみ合わない対話である。梁実秋は、芸術のための芸術の文学自身の要求により、当時の文学状況に対して「編者の話」を提出し、文化科学建設の範疇のなかで文学を語っていたのである。しかし論駁者は、文学を民族独立戦争を維持することに服務させる社会功利的目的から解釈し、歴史、政治的立場に立って梁実秋を批判したのである。梁実秋は、文学作品を評価し採用するに当たって、審美的、芸術的価値に重きを置いていた。この彼の主張には合理性がある。しかし、民族の

生死存亡の危機にあたり、民族の大義、愛国の情熱は人々に必然的に抗戦に背理するかそれを弱めるようないかなる言論をも容認できなくさせていた。歴史の角度から見れば、当時の文芸界の梁実秋の「抗戦無関係論」への批判は、理解できるし必然的なものであった。⁽⁹⁾

では、このように解釈されてきた梁実秋の「編者の話」とは、一体、なにを当時の文芸界に提起し、どのような脈絡の中で批判されたのであろうか。そして現在の中国の梁実秋とかれの「抗戦無関係論」評価は、中国国外の論者の疑義に正面から答えたものと言えるのであろうか。

わたしは、すでに魯迅と梁実秋の論争を分析する過程で、それが発生した時期、およびその直後に、左翼文壇では政治的意味付けがなされていたことを明らかにした。同時に魯迅と梁実秋の論争は、相いれない文学論によって生じたものではあったものの、相互の文学論には左翼文学運動に対する共通した認識が「奇妙に」存在していたことも指摘した。この共通認識は、魯迅が神格化される過程で、魯迅から削り取られ、梁実秋の左翼文学運動に対する批判の論点としてのみ「批判の対象」とされてきた形跡が認められるのである。しかし、魯迅の左翼文学運動に対する見解は、一九三六年の抗日統一戦線をめぐる文芸界での「国防文学論争」のなかに表れているのである。

したがって、わたしは抗日統一戦線が結成された一九三八年時点で、梁実秋の「抗戦無関係」論争は、これまでの梁実秋の文学運動への批判の再燃であったこと、さらにこの論争では、「国防文学論争」のなかの魯迅の左翼文学運動に対する見解も同時に払拭されていたことを考察しなければならないと考えるのである。それは、一九三六年十月に死去した魯迅の神格化が「延安文芸講話」へ向かっておこなわれつつある時期のなかでの出来事でもあった。

そこで本論は、一九三〇年代初頭の魯迅と梁実秋の論争の双方の文学的立場と国防文学論争での魯迅の文学的

立場を考察し、抗日統一戦線をめぐる「抗戦無関係」論争が梁実秋の文学的立場を問題視したのみならず魯迅の文学論を否定する方向へと向かっていったことを明らかにしようとするものである。

(1) 梁実秋、「編者的話」（『中央日報』副刊「平明」重慶、一九三八年十二月一日）、蘇光文編選『文学理論史料選』、四川教育出版社、成都、一九八八年、二七五頁。なお、本論で梁実秋の「抗戦無関係論」と言う場合、梁実秋がそれを語ったということの意味するものではない。「抗戦無関係論」とは、梁実秋の「編者的話」に対する批判者側からの表現である。「抗戦無関係論」は、これまで中国現代文学史で通常使われてきている表現であるので、本論ではそのまま使用した。正確に表現するならば、梁実秋の「編者的話」を左翼作家が「抗戦無関係論」として批判した、ということになる。

(2) 同右、二七四頁。

(3) おおむね各種資料集には、羅蓀「与抗戦無関」、宋之的「談『抗戦八股』」、羅蓀「再論与抗戦無関」、水（張恨水）「老板与厨子——也談『与抗戦無関』」、魏猛克「什麼是『与抗戦無関』」、張天翼「論『無関』抗戦的題材」、老舍「文協」給『中央日報』的公開信」等が直接論争に関連する資料として集録されている。

(4) 北京大学、南京大学、厦門大学、安徽師範大学、南京師範学院、揚州師範学院、徐州師範学院、延辺大学、安徽大学「中国現代文学史」編写組編写『中国現代文学史』、江蘇人民出版社、一九七九年、三六五頁。

(5) 同右、三六八頁。

(6) 廖超慧、『中国現代文学思潮論争史』、武漢出版社、武漢、一九九七年、七五六頁。

(7) 梁錫華、『風暴之眼——中国的抗戦文学』研討会之四、『中国時報』人間副刊、台北、一九八〇年六月十九日。

(8) 同右。

(9) 范今主編『二十世紀中国文学史 下冊』、山東文艺出版社、濟南、一九九七年、八三三頁。

(10) 小山三郎、「魯迅と梁実秋の論争——中国現代文学史上の位置づけについて」、『研究年報』第四号、杏林大学附属国際交流研究所、二〇〇一年三月。

二 抗日統一戦線下での梁実秋の主張のもつ意味

梁実秋の「編者の話」やその後のかれの創作活動を見るならば、そこでの文学的立場は、一九三〇年代初頭の魯迅と梁実秋の論争のなかに顕著に表れていた。かれの民国二十八年（一九三九年）以後に執筆された作品「雅舍小品」は当時、いわゆる緊急の課題として提起されていた「文芸の大衆化」とは著しく性格を異にし、その「大衆」を対象としたものではないことがそれを説明している。ましてかれは、中華全国文芸界抗敵協会成立時の文芸界での抗日統一戦線の結成に参加していないのである。

こうした文学的立場は、左翼作家連盟に加わった魯迅とは相いれない立場であった。その文学的立場の違いは、魯迅と梁実秋の間で一九二七年前後から始まり魯迅死去直前にまで続いた多岐にわたる文学論争のなかに観察できる。

魯迅と梁実秋の論争で注目すべき対立は、「文芸の階級性」と「人間性（人性）論」についての論争であり、この論争は左翼作家連盟の成立前後に発生していた。したがって、「左翼文学運動とはなにか」にかかわる文学の根本的な問題が魯迅と梁実秋の双方から提起されていたのである。

ここで注意を要することは、のちに一九四二年の毛沢東の「延安文芸講話」で、「人間性論」が「資産階級の文学観」として一方的に断罪された時に、梁実秋は、毛沢東によって名指しの批判を受け、また魯迅は「絶対的権威」を与えられ、それによって中国現代文学史上で魯迅と梁実秋の論争が解釈されることになったということである。すなわち、魯迅と梁実秋の論争は、「延安文芸講話」でもってその評価が確定したということになるのである。

では、そのような経緯をもつ「文芸の階級性」と「人間性論」をめぐる論争では、魯迅と梁実秋のどのような

文学上の立場の違いが表われ、そこから左翼文学運動がどのように解釈されていたのであろうか。

左翼文学運動は、一九三〇年二月に結成された左翼作家連盟を母体としていた。この組織の結成に、魯迅が中心的役割を果たしていたと一般に中国現代文学史は語っている。一方で自由主義知識人は、雑誌『新月』を刊行し、国民党政府の言論弾圧に抗議し、「思想の自由」を求めて活動していた。梁実秋の活動は、雑誌『新月』を通じての文学活動であったが、かれの文学活動には同時に左翼文学運動に対する徹底した批判が込められ、このことが左翼的傾向をもつ作家との間に確執を招く原因となっていた。そしてそうした対立の図式のなかに、魯迅と梁実秋の論争が発生していたのである。しかし、先にのべたようにこの論争は突然発生したのではなく、それまでの数年にわたる双方の文学上の見解の違いが一気に噴出したものであった。

文学上の見解の違いとは、なにか。論争のなかで明確に表れるのは、文学作品の対象となる読者の存在であった。あくまで梁実秋にとり、読者には魯迅が主張する「大衆」は含まれていないのである。梁実秋は、「人の聡明さと才能は平等ではなく、人の生活も当然平等ではない。平等は美しい幻夢であり実現できない。経済は、生活を決定する最も重要な要因の一つであるが、人類の生活は決して至るところで経済の支配を受けているわけではない⁽¹⁾」と考えたのである。そして無産階級運動については、「無産者は本来、階級的自覚などもっていない。過度の同情心に富み、はなはだ過激な幾人かの指導者がこの階級観念を彼らに伝授するのであり⁽²⁾」、「こうした革命の現象は永続するものではない⁽³⁾」との見解を示し、無産階級文学を「一、この種の文学の題材は無産階級の生活を主体とし、無産階級の感情、思想を表現し、無産階級の生活状況を描写し、無産階級の偉大さを賛美しなければならぬ。二、この種の文学の作者は、必ず無産階級に属しているか、あるいははなはだ無産階級に同情する人でなければならない。三、この種の文学は、少数の人々（資産をもつ少数の人たち、高等教育を受けた少数の人たち）が読むものでなく、大多数の勞工労働、いわゆる無産階級の人々が読むものである⁽⁴⁾」と定義し、この三

条件が同時に備わることで無産文学になると認識していたのである。

このような見解が前提になり、梁実秋は無産階級文学の誤りを「文学を階級闘争の道具にして、それ自体の価値を否認する」⁽⁵⁾ ことにあると考え、文学を「階級の境界などない。資本家と労働者には確かに違いがある。遺伝、教育、経済上の環境は異なる。このため、生活状況も違う。しかし共通するところもある。彼らの人間性は、なんら異なっていないのである。彼らは誰もが老いや病、死の無常を感じているし、愛の欲求をもち、憐憫や恐怖の情緒をもち、人倫の観念をもち、身心の悦楽を求めている。文学は、これらの最も基本的な人間性を表現する芸術である」⁽⁶⁾ と解釈したのである。梁実秋は、無産階級文学が文学の題材を一つの階級の生活現象の範囲に限定するならば、「実際のところ文学をはなはだ浅薄な、たいそう狭隘にみている」⁽⁷⁾ と考えていたのである。

ここから梁実秋が無産階級文学を批判した根拠は、無産文学理論家が文学を階級闘争の「武器」⁽⁸⁾ にしていること、つまり「無産階級の暴動が最も重視するのは組織である。組織がなければ力量がない。それゆえ無産文学者を称するものは、宣伝という一点に力をそそぎ、個人の感情の表現を極力抑えようとし、階級意識を鼓吹することに力をそそぐ」⁽⁸⁾ と語ったことなかにあった。梁実秋にとり、文学はその根本において階級の区別はなく、無産階級文学運動は理論上成立せず、事実上成功していなかったのである。

その一方で、無産階級文学運動にかかわる魯迅の主張は、梁実秋の主張に逐一、反論するなかで明らかにされていた。

魯迅は、まず大衆の階級意識に関する梁実秋の見解に対し、大衆に「もともとそのものがない」のであれば、「自覚しようも、かきたてようもない。自覚でき、かきたて得ることで、それがもともと存在することがわかる。もともと存在するものは、隠蔽しながくもたない」⁽⁹⁾ と反論し、梁実秋が労働者と資本家の共通した人間性を重視し、文学はそうした基本的な人間性を表現するものであると定義したことは、「矛盾し、かつ空虚である」⁽¹⁰⁾

とのべたのである。魯迅は、「喜怒哀楽は人の情なり」と考えるものの貧乏人には取引所で元手をする悩みはないし、石油王に石炭がらを拾う北京の老婆のつらさがわかるはずはないとのべ、「かりに、われわれは人間だから、人間性の表現をその範囲とするというなら、無産階級は、無産階級だから無産文学を作ろうとするのである⁽¹¹⁾」と主張したのである。人間は階級社会ではその属する階級性を絶対に免れられないと考える魯迅にとって、無産階級文学は確かに存在したのである。

したがって、魯迅は、無産階級文学の存在理由を「貧乏人」や「石炭がらを拾う北京の老婆」のもつ人間性の観点から語り、現在は読者の観賞力が幼稚であり、りっぱな作品を要求することは不可能であるが、「無産文学とは、自分たちの力で自分たちの階級および一切の階級を解放するための闘争の一翼であり、それが要求するのは一切合財であって、片隅の地位ではない⁽¹²⁾」と無産階級文学の将来の可能性を語っていたのである。

このように梁実秋と魯迅の見解を比較するならば、かれらの文学には異なる読者が存在していたのである。人間性の解釈の違いは、梁実秋が労働者と資本家の共通した人間性を重視し、魯迅が無産階級には資本家の理解し得ない人間性があると考えたことに起因していた。この違いが「無産階級文学」の是非をめぐる対立に顕著に現れていたのである。

しかし、この対立には、無産階級文学への共通した認識が存在していた。魯迅は、梁実秋の無産階級文学の定義を「誤り」として斥けたが、同時に左翼作家連盟内の革命作家の文学論を厳しく批判していたからである。その革命作家の文学論とは、現実には梁実秋が忌み嫌った無産階級文学そのものであった。つまり魯迅は梁実秋の文学論を批判しつつ、同時に左翼作家連盟内で革命作家とは異質な文学論を展開していたことになるのである。

では魯迅の文学論は、どのように異質であったのか。魯迅は、梁実秋が無産階級文学の文学への「束縛」を問題視していたことに対して、「文学者には自由な創造が必要で、王侯貴族のお雇いにされたり、無産階級の威嚇

にさらされたりして、その功績や徳行をたたえる文章を作るべきではない、と言う。それはそのとおりだが、我々の目にした無産文学理論のうち、ある階級の文学者に、王侯貴族のお雇いになるな、無産階級の威嚇のもとでその功績や徳行をたたえる文章を作れ、などとのべた人間は一人もいない⁽¹³⁾とのべ、逆に梁実秋の文学論は「資産を文明の祖先とみなし、貧乏人を劣敗したカスとみなすあたり、一瞥しただけで、それが資産階級の闘争の『武器』——いや『文章』であることがわかる」と批判するのである⁽¹⁴⁾。

魯迅の批判の鋒先は、同時に無産階級文学を標榜する革命作家に対しても「梁先生と同様で、無産階級理論に對して、どうも『意のままに解釈する』という誤りに陥っているくらいがある⁽¹⁵⁾」とのべ、成仿吾、錢杏邨らの文芸理論について「思うにこれは、自分で勝手にさわざたてると言うやつである。私が目をとおしたところによれば、それらの理論は、すべて文芸にはかならず宣伝の働きがあると言っているだけのことで、宣伝に類する文章でさえあればそれが文学だ、などと誰も主張するものはいない。なるほど、一昨年来、中国には、スローガンや標語をつめこんで無産階級を気取った詩や小説が確かにたくさん現われた。だが、それらは、内容も形式もともに無産風ではないところから、スローガンや標語でも使わないことには『新興』ぶりを表現するすべがなくなつたことで、実際には無産文学などではない⁽¹⁶⁾」と断言したのである。

この魯迅の文学姿勢には、彼が誤りとして斥けた梁実秋の無産階級文学の定義が現実のものとなつて存在していた左翼文学運動の潮流への警告が発せられていた。すなわち、梁実秋の解釈した無産階級文学は、左翼作家連盟の中に存在していたのである。そして、魯迅もその存在を認め、そうした無産階級文学の傾向を問題視していたのである。魯迅の無産階級文学の解釈は、梁実秋の解釈した無産階級文学を「誤り」として斥けたものの魯迅も梁実秋も無産階級文学の現実のあり方に「共通した認識」を示していたのである。それは、文学への外部からのいかなる干渉をも忌み嫌う文学姿勢であつた。外部からの干渉とは、政治、政策的見地から作家の自律的創造

性を損ない、作家が主体的に現実を観察し、それに関与することを阻害するような「功利主義」の存在である。

では、魯迅は左翼文学運動とどのようにかかわっていたのであろうか。これまで中国現代文学史では、魯迅と左翼文学運動を一体化してきているが、現実には左翼作家連盟内では「文学のあり方」をめぐって作家間の紛糾が存在し、その紛糾は一九三六年には国防文学論争へと発展していったのである。また、左翼作家連盟成立前夜に魯迅の文学観は、革命作家から「小資産階級」の文学観として批判され、「集中攻撃」を受けていた。魯迅が梁実秋と論争する一方で、かれらの文学観を問題視していたのは、そうした経過が介在していたからである。つまり魯迅は、左翼作家連盟参加後も革命作家との論争で示していた文学姿勢とそこから派生する文学観を修正していた訳ではなかったのである。

しかし魯迅は、むしろ積極的に左翼文学運動に加わっていたことも事実であった。馮雪峰は、当時を回想するなかで、魯迅が左連を通じて、青年と革命的大衆と連繫を保つことができたとのべ、「この時期における彼の積極的態度と非常に切実な意見とは、その成立をうながす一種の力であった」と魯迅と左連の関係を語っている。さらに魯迅は左連内では、梁実秋を「資本家の走狗」と罵った馮乃超の意見に加担していたのである。

これらの事実からは、魯迅が左翼文学運動を通じて青年と革命的大衆と連繫を保とうとしていたこと、馮乃超ら党員作家と歩調を合わせていたことがわかるのである。またこの時期の梁実秋との論争からは、魯迅がそれまで「革命の目標も方法も分からなかったし、さらにそうした知識を得ることもできなかった」と考えていた「中国人の典型」としての阿Q、つまり一般大衆を読者の対象としていたことは明らかである。したがって、魯迅の文学運動は、一般大衆を読者の対象とする限り、梁実秋の文学論を受け入れることができなかつた。同時に魯迅のその文学運動は、梁実秋との論争を通じて、それを押し進めるのに弊害となる文学潮流の存在を左連内にも認めていたのである。

左連はその後、国民党の弾圧下でそれに対抗する中国共産党の革命路線を忠実に実践する革命団体としての傾向を強め、政治路線の文芸への干渉が徐々に拡大していくことになる。特に満州事変以後、大衆動員を目的とする政治路線が左連に貫徹し始めると、再び左連結成直前の魯迅の文学観に向けたものと同じの批判が現れたのである。加えて、左連の指導者であり、魯迅と親しい関係にいた瞿秋白がソビエト区へ移った一九三四年以降、周揚らの黨員作家が左連を指導し始めると、魯迅と黨員作家との間には確執から対立が芽生え始めた。

このような現象は、一九三六年春、中国共産党が抗日統一戦線の結成を唱えたことよって表面化した。抗日統一戦線の結成は、敵対してきた国民党にそれへの参加を呼びかけるものであったことから、これまで国民党を主要敵とし階級闘争を標榜してきた左翼作家連盟の役割が消滅することを意味した。その時、その解散のあり方をめぐって、魯迅は周揚ら黨員作家と対立したのである。この対立は、左連内に生じていた双方の不信感が介在し、抗日統一戦線での文学のあり方をめぐる性格をもっていた。そしてこの対立は、周揚ら黨員作家が抗日統一戦線のなかで、「国防文学」のスローガンを提起し、あらゆる階層の作家を組織しようとした時に、胡風が「民族解放戦争の大衆文学」のスローガンを提起したことによって、上海の左翼文壇を二分することになったのである。

このように国防文学論争は、中共の政治路線が変更するなかで、左翼作家連盟の解散をめぐって争われたものであった。そこでは解散によって「左翼文学の伝統」が途絶えることを危惧する作家と抗日統一戦線へ作家を團結しようとする黨員作家の政治的文学的立場の違いが鮮明に表われていた。前者の立場にいたものは魯迅、胡風の一群の作家であり、周揚ら黨員作家は後者の立場にいた。この対立は、魯迅の意向を受けた胡風が一九三六年六月に「民族解放戦争の大衆文学」のスローガンを理論づけた「人民大衆は文学になを要求するのか」を発表したことで深まり、さらに七月に魯迅ら六十三名の作家による「中国文芸工作者宣言」が発表されたことで、

すでに成立していた中国文芸家協会との間の組織的対立へと向かっていったのである。

では、この政治的文学的対立は、左翼文学運動にとってなにを意味していたのであろうか。すでにのべたように、対立は明らかに双方の文学観の違いから派生していたものであり、魯迅、胡風らの一群の作家が左翼作家連盟の時代に力を注いだ左翼文学の伝統を、黨員作家が抗日統一戦線の趣旨に反するものとして斥けようとしたことによるものであった。国防文学論争が左翼作家連盟の解散を争点にしているのは、左翼作家連盟の時代に生まれた文学潮流を推し進めようとする魯迅ら作家に対して、それは抗日統一戦線の結成に有害であり、「左」のセクト主義の発言であると黨員作家が断定した結果であった。言い換えれば、文学と政治のかかわり方の違いが論争の根底にあった。それは、論争の過程で魯迅のつぎのような発言に表われている。

「民族革命戦争の大衆文学は、決して義勇軍の戦いや、学生の請願デモ……等々の作品を書くことだけに限定されるのではない。(中略)中国の唯一の出路は、全国一致して日本にあたる民族革命戦争である。……作家は、自由に労働者、農民、学生、強盗、娼妓、貧乏人、金持ちを描いていい。どんな材料でも構わない。書けば、すべて民族革命戦争の大衆文学になる」⁽¹⁹⁾し、「ある作家は、『国防文学を主題とした』⁽²⁰⁾作品を書かなくても、やはりさまざまの面から抗日の連合戦線に参加する」と。

この発言には、胡風と周揚の対立から始まった論争過程で、魯迅が周揚らの文学的立場を公に批判する意図が含まれていた。その対立の論点は、胡風が作家に「現実の生活要求から生まれ」、「一切の社会紛糾の主題を統一した」⁽²¹⁾文学作品の創作を呼びかけたことをめぐって、周揚らの黨員作家がそれは「統一戦線を破壊するものである」と断言し、「現実是我々にさまざまな材料を提供してくれるが、現実の真実を表現するには、決して分け隔てなくあらゆる生活現象を描いてはならず、時代の中心的内容・社会発展の主要な目標と方向を捉えなければならぬ」⁽²²⁾とのべ、政策的見地から作家に題材と創作方法を厳格に要求したことにあった。この周揚らの主張の論

理からすれば、魯迅が論争過程で「民族革命戦争の大衆文学」は無産階級革命文学の現在における一つの発展であると位置づけたことは、「そうなると、それが現段階における文学の分野での統一戦線のスローガンとはならないことは自明のことであり、『左』のセクト主義者の大言壮語も戈を収めるべきであろう」という魯迅批判に直接つながるものであった。

国防文学論争に見られる魯迅の文学的立場は、周揚らの党員作家の言動を「巧妙に革命的民族の力を扼殺し、革命的大衆の利益を無視して、ひたすら革命を借りて私利を営む」と断定するものであった。魯迅の周囲にいた作家にとっては、抗日統一戦線に賛同しようとも、左翼作家連盟の解散を容認できるものではなかった。それは、左翼作家連盟が彼らにとって左翼文学運動を発展させる砦であったからである。

それゆえ、ここでは双方の創作実践面でもその違いは明確に表われていた。国防文学派が夏衍の国防戯劇「賽金花」に高い評価を与える一方で、魯迅がこの作品を「文章を書くのに、『最も中心とすべき主題』がもう決まっていた」と皮肉っていたのである。確かに国防戯劇「賽金花」は、国防文学のスローガンを擁護する人たちによって、「時代の中心的內容・社会発展の主要な目標と方向を捉えなければならない」代表的作品と考えられていた。同時に国防文学派からは魯迅が高い評価を与えていた東北出身の新人作家蕭軍の作品に批判が提起されてきたのである。

以上から観察できることは、魯迅の左翼文学運動への姿勢は、左連の時期を通じて一貫して変化することがなかったということである。繰り返すならば、魯迅が実践した左翼文学運動は、当初から左翼作家連盟の内部で特別な存在であり、彼の党員作家に向けた左翼文学運動への批判は、梁実秋のそれへの批判の論点と奇妙にも一致していたのである。

国防文学論争は、日中戦争が上海に波及するなかで、結論がでることはなく終結した。この論争は最終段階に

なると、中国共産党からの調停工作がおこなわれ、その結果として「文芸界同人爲団結禦侮與言論自由宣言」が出されたのである。「我々各自の固有の立場を保持し、従来固く定めた信仰にもとづき、過去の路線に従い」とのべたその宣言からは、魯迅の立場がそこにとりいれられているようにも考えられる。⁽²⁹⁾しかし、司馬長風が指摘したように、周揚らの中国文芸家協会の参加者は、魯迅らの「中国文芸工作者宣言」に加わった作家よりもはるかに多数であった。そこには国民党系の作家も加わっていた。このことは魯迅がすでに少数派であり、かれの意向とは別に党員作家によって抗日統一戦線が形成されつつあったことを表わしていた。

このような経過を経て、魯迅死後、日中戦争が全面戦争へと拡大するなかで、西安事変を契機として第二次国共合作が成立し、文芸界の抗日統一戦線は、中華全国文芸界抗敵協会となって実現する。しかしさまざまの傾向をもつ作家が重慶に集合した時、再度、抗日統一戦線の未解決の重大な問題が表面化することになるのである。国防文学論争の未解決の論点は、梁実秋批判へと形を変えて引き継がれ、抗日統一戦線下で梁実秋の主張は、「抗戦と無関係」な「有害」な見解と解釈されたのであった。

それは梁実秋の「編者の話」のなかに、魯迅との論争を通じて変化することのなかった見解が読者に示されていたからである。「抗戦無関係論」と断定された箇所は、その直前に「文章の性質には決してこだわらない。しかしわたしにも幾らかの意見がある」と⁽³¹⁾「但し書き」が置かれ、問題視される箇所へと続くのである。梁実秋は原稿の主たる拠り所は読者の援助にあると考え、「われわれは読者が永遠に読者の立場だけにとどまらないように希望する。わずかな誌面ではあるが読者の共通した原稿の発表の場にしたい」とのべていた。そして梁実秋は、「読者は各地、各階層に幅広くおり、それぞれの読者が特徴をもち、それぞれの読者に経験があり、それぞれの読者に作風がある」とのべ、読者に「少しばかりの工夫でもって文章を書き、寄稿してもらえらば、本誌の内容を充実させる最も有効的なやり方である」と⁽³²⁾考えていたのである。

この梁実秋の「編者の話」は、これまで左翼文学運動への反発のなかで示された文学姿勢を表すものであった。梁実秋が「『文壇上』だれが盟主であり、大将であるのか、さらに判然としない」とのべたのは、抗日統一戦線下におかれた文学のあり方への彼の立場の表明であった。それゆえ、抗日統一戦線下で左翼作家が厳格に規定しようとした文学のあり方に背をむけた主張とみなされたのである。梁実秋を批判した左翼作家にとっては、梁実秋の主張は彼らの文芸政策とは離反していた。さらに梁実秋は彼らと相対立する文学姿勢を貫いていた「新派」「資産階級」の文人であった。しかも梁実秋は、すでに魯迅と左翼文学運動をめぐる真正面から対立した「否定されるべき人物」として左翼作家のなかで位置付けられつつあったのである。

ではつぎに、梁実秋の見解を「抗戦無関係論」として批判した左翼作家と梁実秋の論争のなかに、国防文学論争で魯迅と対立した党員作家の文学観と批判の論理がどのように表出していたのかを見ることにしよう。

- (1) 梁実秋、「文学是有階級性的嗎？」、『新月月刊』第二卷六・七期合刊（一九二九年九月発行）、上海書店影印版、上海、出版日不明、一頁。
- (2) 同右、二頁。
- (3) 同右。
- (4) 同右、四頁。
- (5) 同右、五頁。
- (6) 同右。
- (7) 同右。
- (8) 同右、七頁。
- (9) 魯迅、「『硬訳』と『文学の階級性』」、『魯迅全集』第六卷、学習研究社、一九八五年、二九一三〇頁。
- (10) 同右、三二頁。

- (11) 同右、三二―三四頁。
- (12) 同右、三八頁。
- (13) 同右、三四頁。
- (14) 同右。
- (15) 同右、三七頁。
- (16) 同右、三五頁。
- (17) 馮雪峯、鹿地亘・呉七郎訳『魯迅回想』、ハト書房、一九五三年、七四頁。
- (18) 林毓生、丸山松幸・陳正醒訳『中国の思想的危機―陳独秀・胡適・魯迅』、研文出版、一九八九年、一七九頁。
- (19) 魯迅、「現在の我々の文学運動について」（一九三六年七月十日）『魯迅全集』第八卷、学習研究社、一九八四年、六六四―六六五頁。
- (20) 魯迅、「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について」（一九三六年八月十五日）『魯迅全集』第八卷、五九七頁。
- (21) 胡風、「人民大衆向文学要求什麼？」（一九三六年六月）新潮出版社『国防文学論戦』（香港影印本）、上海、一九三六年、一五四頁。
- (22) 周揚、「現階段的文学」（一九三六年六月）『国防文学論戦』、一七四頁。
- (23) 周揚、「与茅盾先生論国防文学的口号」（一九三六年八月）『国防文学論戦』、三五―一頁。
- (24) 魯迅、「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について」『魯迅全集』第八卷、五九六頁。
- (25) 魯迅、「これも生活だ」（一九三六年九月）『魯迅全集』第八卷、六七六頁。
- (26) 諸家「賽金花」座談会」（一九三六年六月）巫峰芬編『夏衍研究專集』下、浙江文艺出版社、一九九〇年、八七―二頁。二回開催された「賽金花」をめぐる座談会は、歴史劇の意義を「歴史運動の主要な輪郭をはっきりさせなければならぬ、新興の運動の代表人物を強調し、その運動のなかの典型としなければならない、新たな運動に相反する立場の人物を暴露、風刺し否定しなければならぬ、外来勢力の政治性、残虐性を十分に表現しなければならない」点にあるとべていた。

(27) 魯迅、「三月の租界」(一九三六年五月)『魯迅全集』第八卷、五七四―五七七頁。この雜文は、田軍(蕭軍)の作品に対する国防文学の側からの批判に対して魯迅が痛烈に批判したものである。

(28) 「文芸界同人為團結禦侮與言論自由宣言」『国防文学論戰』付録、九頁。

(29) 李歐梵、『現代性的追求 李歐梵文化評論精選集』、麥田出版、台北、一九九六年、三二九頁。

(30) 司馬長風、「国防文学」論戰、『新文学史話―中国新文学史統編』、南山書屋、出所・出版時期不明、二六一頁。

(31) 梁実秋、「編者的話」(『中央日報』副刊「平明」[重慶]、一九三八年十二月一日)、『文学理論史料選』、二七五頁。

(32) 同右。

三 「抗戦無関係」論争とはなにか

これまでの中国現代文学史には、梁実秋が『中央日報』副刊「平明」に「編者的話」を掲載した経緯は語られていない。この状況について、当時国民党の側にいた文学者劉心皇は唯一、およそつぎのように語っている。

当時、中華全国文芸界抗敵協会は、すでに左翼文人に掌握されており、おおくの出版物と新聞の副刊もかれらの影響下にあり、その論調は一致していた。そのため『中央日報』副刊の編集は、当然左翼文人のなかから探ることができず、中華全国文芸界抗敵協会の外部から人を探すことになった。『中央日報』副刊が梁実秋に編集を依頼したのは、かれが反「左翼文人」であつたからである。梁実秋は『中央日報』社が主編を依頼してきた理由を当然理解していた。果たして、かれは新聞社当局の希望通り、冒頭に当時の「文壇」を風刺して、「『文壇上』だれが盟主であり、大将であるのか、さらに判然としない」とのべたのである。同時にかれが「ペンをもつと抗戦を忘れることのできない人がいる」とのべたのは、左翼文人に向けた批判であつた。しかし、抗戦文芸が左翼的誤りをおかしていたと批判したことで相手に攻撃の口実を与えてしまったのである。⁽¹⁾

こうした梁実秋と『中央日報』社との当時の関係は、劉心皇が語っている以外に見出すことができないので、事の真相を確認することができない。しかし、すでにのべたように、梁実秋の従来からの文学的立場は、一九三八年三月二十七日に漢口で中華全国文芸界抗敵協会が成立し、その後上海、昆明、桂林、広州、香港、延安等々に分会が拡大し、そこで「文章下郷、文章入伍」のスローガンが提起され、文芸の功利性や通俗性、大衆性が一斉に語られ始めると抗日統一戦線下の文壇のなかで、微妙な位置に置かれることになったことは推測できる。まして、抗日統一戦線下の文芸領域には、国防文学論争での中共黨員作家の主張から明らかのように、当初からかれらが積極的に関与していたのである。したがって、劉心皇が「おおくの出版物と新聞の副刊もかれらの影響下にあり、その論調は一致していた」とのべるのは、左翼作家が数多くの雑誌、新聞を創刊し、文学芸術領域で積極的に活動を開始していた事実を説明したものと解釈できる。

そうした形跡は、例えば一九三八年一月十一日に中共中央長江局が漢口で刊行した『新華日報』の論調に表われていた。『新華日報』は、国共合作下で「中共の主張を代表する」⁽²⁾目的をもって発刊された新聞であり、十月には重慶に移り、四七年二月まで三千二百三十一号を発行している。この新聞は、『新華日報』発刊詞」⁽³⁾にのべられているように「抗日がすべてに勝り、すべてが抗日に服務する」原則の下で、「抗日を志す個人、集団、団体、党派の共同の喉舌となることを願い、全国民衆の共同の叫びとなることを求め、抗日に有害なすべてのや国内の団結の分裂を企てる漢奸およびトロツキー派の陰謀に無情の打撃を与える」⁽³⁾ことを使命としていた。したがって、梁実秋を批判した左翼作家は、すでに『新華日報』の声明にみられる立場にいたと考えられるのである。

同時に一九三八年四月一日に報道された「中華全国文芸界抗敵協会宣言」は、中華全国文芸界抗敵協会の結成にいたる背景を語った後に、「文芸界同人は逃避せず屈服することのない精神でもって、ペンを武器とし、先を

争って抗敵工作に参加した。ある同人は、民間、軍隊のなかへ服務と宣伝に向かい、実際の観察と体験を得ることと創作能力を充実させ、抗戦精神を激しく喚起した」とのべ、作家の役割は「国内では、民族の危機を叫び、日本の罪状を宣布し全民族の厳肅な抗戦情緒を作りだし」、「世界には、日本の野心と暴行を暴露し、全人類の正義感を引きだし、ともに侵略者を制裁する」ことを呼びかけることにあると宣言していたのである。そしてこの宣言を実践するための文芸工作者の任務は「自己の責任を追求し」、「個人の心血を尽くし、この神聖な任務を完成し、このために連合しなければならない」とされてきた。すなわち抗日統一戦線下の文学は、「政府と民間の架け橋となり、抗戦の国策に沿って」、「一方では士気を高揚させ、一方では各方面の欠点と弱点を摘発」する役割をもち、そのなかでは「抗日を妨害するものは漢奸であ」と解釈されたのである。⁽⁶⁾

このように抗日統一戦線下の文学の役割は、明確に規定されていた。その役割は、より具体的に作家の創作実践活動のなかでさまざまに議論されていた。たとえば、一九三八年五月十日の『自由中国』一卷二号の「抗戦以来文芸的展望」⁽⁷⁾では、郭沫若、老舍、張申府、潘梓年、夏衍、呉奚如、郁達夫、臧雲遠、北鷗らが「抗戦以来の文芸の特性」「抗戦以来の文芸工作者の成果」「抗戦以来の文芸工作者の任務」「中国文芸の前途」をめぐって、つぎのように語っていたのである。

(夏衍) 抗戦以来、「文芸」の定義と受けとめ方に変化が生じている。文芸は少数の人々や文化人が鑑賞するものでなく、大衆を組織し教育する道具に変わったのである。この新しい定義に同意する人は、この道具の効能を十分に発揚しているのであり、この定義に同意しない「芸術至上主義者」は、大衆からは漢奸と見なされるのである。

(呉奚如) 文芸作品を通じて、広大な人民の侵略者に対する憤怒を呼び起こし、多くの人民が神聖な戦場に馳せ参じるように激励することを希望する。

(臧雲遠) 抗戦期の文芸工作者の任務は、どの文芸工作者も抗戦のためにペンを置くのではなく、文芸工作者の総動員を完成させることにある。

(老舍) 士気、民気を激励し、抗戦精神を確固たるものにする。

(郭沫若) 集体創作の方式を採用しなければならない、積極的に實際工作に参加しなければならない、文士の潔癖を洗い流し、大衆化に力を尽くさなければならない。

(北鷗) 文芸工作者は、現実を描写するだけでなく、現実を説明し現実を前方へと推し進めなければならない。そのために抗戦を描写し、抗戦を説明し、さらに抗戦の勝利を勝ちとる基礎の上に、最も鋭利なペンでもって全中国人民が敵に向かって強固な反抗するように人民を覚醒し鼓舞し訓練しなければならない。

(張申府) 新写実主義に立ち、文芸は生活、特に大衆の生活と一体化する努力が必要である。このようにしてこそ、中国文芸は前途が開けるのであり、抗戦と新国家、新社会の建設に必ず役にたつのである。

また同年四月に成立した国民政府軍委政治部第三庁の庁長に就任し、宣伝部門の責任者となっていた郭沫若は、六月二十日の『自由中国』誌上に「抗戦与文化問題」を語っていた。第三庁成立に当たって陳誠に条件を提出することで就任した郭沫若は、同時に『新華日報』によって「革命文学の先駆者」郭沫若先生が、「漢口に來られる政府の要職に就かれたことは、抗戦にさらに大きな貢獻を果たすことになる」と報道されていたことからわかるように、郭沫若のその立場からの意見は、抗日統一戦線下では重要な影響力をもっていたと言えよう。ここで郭沫若は、「抗戦が必要とするものは大衆動員であり、その際には深遠な理論を必要としないし、卓越した芸術も必要でない。理論が深遠で、芸術が卓越するならば、ますます大衆と絶縁し、抗戦の力量を弱めてしまう」と語り、つぎのように結論したのである。⁽¹⁰⁾

一、抗戦期間中、一切の文化活動は抗戦に有利となるか、一つの焦点に集中しなければならない。二、抗戦

は大衆動員を必要とするので、一切の文化活動は大衆化する必要がある。三、大衆と文化活動を迅速に、普遍的に接近させ、言論、出版、集会、結社の徹底した自由を要求し、戦時教育の実施を要求する。

そしてこの結論の最後に、「抗敵理論を単純なものとして嫌い、すべて同じような論調とみなして嫌い、高尚な理論で俗流を越えていると考えている幾人かの文化人は、実際には敵としての嫌疑を犯しているのである」⁽¹¹⁾と
のべていた。

郭沫若の発言は、五月十八日に毛沢東が解放区の魯迅芸術学院で、抗戦文芸は人民を団結し、人民を教育し、日本帝国主義に打撃を与える武器であると語っていたことと八月五日の『新華日報』社論が国民党政府の民主抑圧に抗議する大規模の宣伝を提起したことに呼応しているかのように思える。しかし、この時期の郭沫若の発言は、あくまで国民政府軍委政治部第三庁の庁長の立場からのものであったのである。

梁実秋が『中央日報』副刊「平明」に「編者の話」を掲載したのは、この郭沫若の発言から半年後のことであった。その間に政治面では十月に毛沢東が「中国共産党在民族戦争中的地位」を報告し、周恩来は武漢で座談会を招集し文芸でもって抗日救国を指示していた。また中華全国文芸界抗敵協会は、通俗文芸講習会、詩歌座談会を開催し、文芸の大衆化をめぐる文芸の旧形式の運用問題を討論し、文芸の抗戦に服務する諸問題を提起して⁽¹²⁾いた。したがって、梁実秋の発言は、まさに文壇では文芸が抗戦に服務する課題が一様に問われているなかで発表されたものと言えるのである。

このような抗戦初期の文学潮流から梁実秋の「編者の話」を考察するならば、それが「抗戦無関係論」として批判されたのは、そうした抗日統一戦線下で解釈されていた文学のあり方と著しく性格を異にする見解であったからに他ならない。梁実秋は、左翼作家が問題視した個所の直前に「抗戦に係する題材をわれわれは最も歓迎する」とのべていた。しかしその発言が言及されずに梁実秋に向けられた「抗戦無関係論」批判は、かれの文学

姿勢それ自体が問題視されていたことを示している。

したがって、左翼作家の梁実秋を批判する論調からは、抗日統一戦線下の文芸のあり方がどのような基準で規定され、そこではなにが排除されているのかが明確に表れているのである。それは、国防文学論争で魯迅と対立していた黨員作家が示していた文学的立場であり、それに対して梁実秋はかつて魯迅との論争のなかで示していた左翼文学への嫌悪感を再度表わしていた。

梁実秋の「編者の話」を最初に問題視したのは、孔羅蓀であった。かれは、抗戦がすでに中華民族生死存亡の主要な要となり、抗戦の波及する地方は大都市だけにとどまらず中国の至るところに拡大しているとのべ、「このような状況のなかで、人々に目をしつかり閉じさせて見えないようなふりをさせることは不可能なことである⁽¹³⁾」と語った。そしてこの認識から、梁実秋は「抗戦と無関係の題材を探し」「真実を描くことを要求している」が、今日の中国で「真実に忠実な作者」が「抗戦と無関係の題材」を探すことは「自分の部屋に閉じこもり幻想に耽っているようなものである⁽¹⁴⁾」と批判したのである。

また宋之的は、梁実秋の提起した「抗戦八股」を問題視した。孔羅蓀と同様に、宋之的も「われわれが見るところでは、一人として、一つの出来事として、現在『抗戦と無関係』のものはない。」「われわれは、中国人であるのだから、いま書く文字はすべて抗戦と関係があるのは当然のことである⁽¹⁵⁾」と認識していた。そして現在発表されている「速写(スケッチ)」等の作品は、いわゆる偉大な作品とは程遠いが「題材は真実であり、人物は真実であり、生活は真実であり、情緒も真実である」ので、「読者は確実に有益なものを感じるのであり、これらの速写のなから抗戦の一面を認識し、抗戦の決意を増強する⁽¹⁶⁾」とのべた。宋之的は、抗戦八股は「だれにとっても有益でない」とする梁実秋の見解は独断にすぎず、「抗戦に関係があってもいいし」「抗戦に無関係であってもいい」というのは立場の定まっていない者か、「いわゆる『王道楽土』を夢見る『虫けら』」のどちらからか

あると結論した。⁽¹⁷⁾

梁実秋のこれらに対する反論は、再度読者に編集方針を説明するなかで語られ、「人生のなかには書かれるべく多くの題材があり、それらは必ずしも『抗戦と関係のある』必要はない」というかれの文学的信念からだされたものであった。しかし、孔羅蓀からの批判のなかに、彼が梁実秋の名前を出さずに「某先生」と表現したこと、「ドイツ風の住居に住んでいたものが、いまは重慶の古びた住居にいる」と指摘していたことをとりあげ、「このことは事実反論している」と反論したのである。梁実秋にとり、この批判のやり方は、「十年前に左翼作家を自称する人物が梁実秋は授業にいくときに黒塗の絨緞を敷いた自家用車にのっている」と言ったのと同じ論法であり、「わたしが打倒すべきある階級に属している」ことを意味していると解釈していたのである。こうした批判を「個人攻撃であり、悪意のある挑発⁽¹⁸⁾」と見なした梁実秋は、かれに向けた批判を一九三〇年代初頭の左翼作家との論争が再現したものと考えていた。

では梁実秋の見解を一樣に「抗戦無関係論」と断定した左翼作家は、その根拠をどこに求めていたのであろうか。孔羅蓀は、梁実秋からの反論をさらに批判するなかで、梁実秋の二年前の見解を問題視していたのである。ここで孔羅蓀は、「一・二九北京学生運動が偽冀察政権に反対運動を起こしてからまもなく、まさにアルバニアが英雄的反帝反ファシストの旗印を掲げ、イタリアの『文明侵略』に抵抗した時期に、梁実秋先生は『自由評論』という刊行物を出版し、多くの卓越した評論を発表していた⁽¹⁹⁾」とのべ、そのなかで梁実秋が「われわれの中国は弱国である。アルバニアよりもさらに弱国である。われわれは『打倒帝国主義』のスローガンを叫ぶべきでなく、さらには『世界の弱小民族を助ける』とか『世界の大同』などを夢想してはならない。われわれは現在、弱国であることを認めるべきであるのだ⁽²⁰⁾」と主張していたことを問題にしていたのである。

孔羅蓀は、梁実秋のこの発言から「誰であれ中国人がこれを読むならば、梁実秋先生の主張が果たしてどのよ

うなものかはわかるというものだ」、「抗戦がすでに一年六か月になろうとしている今日、良心をもつ中国人は祖国の抗戦に服務し、祖国の抗戦のために身を捧げ、すべての工作を祖国の抗戦に有利なものとし、人々すべてを祖国の抗戦に有利な人材としている。しかし梁実秋先生は、「抗戦八股」を抹殺し、今日の抗戦の偉大な力量の影響を抹殺し、今日中国に存在する真実が抗戦だけにあることを抹殺し、今日全国文芸界が共同して努力している一つの目標である抗戦の文芸を抹殺している」と主張し、「抗戦の十八か月には、抗戦と無関係な人生が存在するの⁽²⁾か」と結論した。

以上の左翼作家の梁実秋批判からは、左翼作家は抗日統一戦線下で梁実秋がかれらの実践する「抗戦文芸」に背を向けているか、「抗戦文芸」自体に反対をしていると一様に認識していたことがわかるのである。かれらは、梁実秋のこれまでの抗日戦争にかかわる一連の言論にその根拠をもとめ、「編者の話」は「抗戦無関係論」を提起したものと解釈したのである。すなわち抗日統一戦線下の抗戦文芸には、国防文学論争に出現していた「時代の中心的内容・社会発展の主要な目標と方向を捉えなければならない」要求、つまり政策的枠組みが作品世界に絶対的基準として存在していたのである。それは左翼作家が抗日統一戦線下で実践しつつある文芸政策であり、梁実秋の見解はそれと著しく乖離し、なおかつ対立する要素をもっていたのである。

このように「抗戦無関係」論争を考えてみるならば、梁実秋と左翼作家の関係は、一九三〇年代初頭のかれらの対立関係の延長線上に位置し、梁実秋は再度、抗日統一戦線下に出現した左翼文学の潮流に不信を抱いていたのである。また「抗戦無関係」論争の論理には、国防文学論争で魯迅が激しく対立した党员作家の文学論が濃厚に投影していた。すなわち梁実秋が不信感を抱き、魯迅が忌み嫌った文学潮流の存在が「抗戦無関係」論争の論理に表れていたのである。

では、「抗戦無関係」論争は、どのようにして終結したのであろうか。梁実秋が「編者の話」を掲載した同じ

十二月に「文協」を代表して老舎が『中央日報』にむけての「抗議声明」を起草した。この所信は、張道藩の「干渉」により『中央日報』に掲載されなかったと言われている。この「干渉」がどのようなことを意味するかは、中国現代文学史には語られていない。しかし、文協理事であり国民党政府教育次長の文学領域を指導する立場にいた張道藩がそれ以上に梁実秋を擁護した形跡が存在しないことを考えると、梁実秋は魯迅との論争の時と同様に再度孤軍奮闘を強いられていたことは明らかである。

その老舎執筆による「抗議声明」は、「現時点のすべてが抗戦と関係があり、文芸は軍民の精神食料となっている」、にもかかわらず梁実秋は、「文壇はどこに指導権がおかれているのか」とのべ、「文人相軽ろんず」の悪弊を助長している。これは「抗戦文芸の発展を阻害するはなはだ重大な問題である」と梁実秋に抗議しているのである。

老舎のこの抗議文は、全国文芸界の団結の観点から書かれていることを考えれば、明らかに左翼作家の批判論理と異なっている。しかし、抗日統一戦線下での全国文芸界の団結が図られた時点での梁実秋の左翼作家との確執は、梁実秋の立場を孤立させるものであったことは観察できることである。

(1) 劉心皇、『抗戦时期的文学』、国立編訳館、台北、一九九五年、三四六―三四九頁。中国では梁実秋と『中央日報』との関係をつぎのように語っている。一九三八年九月十五日、重慶で復刊した『中央日報』に社長程滄波が執筆した一文は、国民党当局が文化領域に表した姿勢であったので、「当時の新聞界と文芸界は特別に関心を持たざるを得ないものであった。」そのため梁実秋の「抗戦と無関係論」がでると重慶の新聞界と文芸界は憤って一致してそれに攻撃を加えた、と。(『抗戦时期文芸界跟梁実秋の『与抗戦無関』論的論争』、周定国編『国統区抗戦文芸研究論文集』、重慶出版社、重慶、一九八四年、二八四―二八五頁。)

(2) 陳紹禹、周恩來、博古、「答復子健同志的一封公開信」(一九三八年四月二十九日漢口『新華日報』)、重慶市政協

- 文史資料研究委員会、中共重慶市委党校、紅岩革命紀念館編『抗戰時期国共合作紀実』上卷、重慶出版社、重慶、一九九二年、四四九頁。
- (3) 『新華日報』発刊詞（一九三八年一月十一日重慶）、『抗戰時期国共合作紀実』上卷、四九二—四九三頁。
- (4) 『中華全国文芸界抗敵協會宣言』（一九三八年四月一日漢口『新華日報』）、『抗戰時期国共合作紀実』上卷、四九四—四九七頁。
- (5) 同右、四九五頁。
- (6) 同右。
- (7) 『抗戰以来文芸的展望』（『自由中国』第二号、一九三八年五月十日）北京大学、北京師範大学、北京師範学院中文系中国現代文学教研室主編『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、上海教育出版社、上海、一九七九年、三四—三九頁。
- (8) 郭沫若、岡崎俊夫訳『抗日戰回想録』、中央公論新社、中公文庫、二〇〇一年、五三頁。
- (9) 『郭沫若到達武漢、将出任政府要職』（一九三八年一月十二日漢口『新華日報』）、『抗戰時期国共合作紀実』上卷、五二〇頁。
- (10) 郭沫若、『抗戰与文化問題』（『自由中国』第三号、一九三八年六月二十日）『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、五三一—五四頁。
- (11) 同右、五五頁。
- (12) 『中国近代文学史年表』（小山三郎、同学社、一九九七年）の一九三八年の項目九〇—九七頁を参照。
- (13) 羅蓀、『与抗戰無関』（一九三八年十二月五日重慶『大公報』）『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、二四四頁。
- (14) 同右、二四五頁。
- (15) 宋之的、『談“抗戰八股”』（一九三八年十二月十日『抗戰文芸』三卷二期）『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、二四八頁。
- (16) 同右、二四九頁。

- (17) 同右。
- (18) 梁実秋、「与抗戦無関」(一九三八年十二月六日重慶『中央日報』)『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、二四七頁。
- (19) 羅蓀、「再論与抗戦無関」(一九三八年十二月十一日『国民公報』)『中国現代文学史参考資料 文学運動史料選 第四冊』、二五一頁。
- (20) 同右、二五一―二五二頁。
- (21) 同右、二五二頁。
- (22) 「文協負責人『中央日報』的公開信」、文天行、王大明、廖全京編『中華全国文芸界抗敵協會資料匯編』、四川省社会科学院出版社、成都、一九八三年、二八一―二八二頁。
- (23) 『抗戦時期的文学』、三五三頁。朱学蘭は、論争が「抗戦がすべてに勝る」とする嚴肅な旗印のもとでおこなわれていたので、梁実秋の論点を公に支持する人は少なかったが、世論は一律ではなく間接的に梁実秋の論点を支持していた人もいたとのべている。(朱学蘭、「抗戦時期文芸界跟梁実秋的“与抗戦無関”論的論争」、『国統区抗戦文芸研究論文集』、二九三頁。)

四 結 語

以上の考察から、わたしはつぎのことを明らかにした。

一九三〇年代初頭の魯迅と梁実秋の論争には、左翼文学運動にかかわる類似した見解が存在していた。その見解は、文学芸術に加えられる政治からの干渉を忌み嫌う文学姿勢のなかに見出すことのできるものである。魯迅は、この文学姿勢を左翼作家連盟のなかで貫いていた。また梁実秋は、自由主義知識人の立場から、それでもって左翼文学運動を全面否定する根拠としていた。したがって、魯迅と梁実秋の論争は左翼文学運動の存在の是

非をめぐる対立であったが、創作の自由と作家の主体性を強く希求する姿勢は共通し、そこから派生する左翼文学潮流への批判には共通した見解が示されていたのである。

この文学姿勢を示した魯迅は、左翼作家連盟のなかで黨員作家と政治と文学のあり方をめぐり鋭く対立することになった。国防文学論争にみられる魯迅、胡風と周揚ら黨員作家の対立は、作家の主体性を維持し、創作の自由を前提にして作家自らが抗日統一戦線に参加しようとした作家とあくまで中国共産党の政策のなかで文学のあり方を厳格に規定しようとした黨員作家の政治と文学のあり方の解釈の違いによって生じたものであった。そして梁実秋の重慶の『中央日報』副刊「平明」に掲載した「編者の話」を左翼作家が「抗戦無関係論」として批判したことは、抗日統一戦線のなかで梁実秋の文学観を再度否定する意図をもつものであったが、その批判の論理は国防文学論争で魯迅と対立した黨員作家の文学的立場からのものであった。このように梁実秋の文学観の否定には、国防文学論争での魯迅の文学的立場を否定する同一の論理が存在していたのである。

梁実秋の見解を「抗戦無関係論」として批判した左翼作家と梁実秋の直接の論争は、梁実秋が『中央日報』副刊「平明」主編を退く一九三九年四月頃までのわずか四月程度に過ぎなかった。その間、『新蜀報』『国民公報』『大公報』『抗戦文芸』に十余人が三十余編の批判論文を発表していた。⁽¹⁾しかし、梁実秋の「編者の話」への批判はそれにとどまらず、その後も繰り返し出現し、それは魯迅と梁実秋が忌み嫌っていた左翼文学潮流の生長発展と密接に関連し、「延安文芸講話」の文学潮流へと一体化していくのである。その過程で梁実秋の「抗戦無関係論」は、「ある人々が抗戦文芸を『抗戦八股』として罵っているのは」、「かれらが消滅させようとしているものは『抗戦八股』でなく『抗戦』なのだ」⁽²⁾と解釈され、さらに一九四〇年になると羅蔭は、それは「現在の上海で『東亜新秩序建設のため』に従事しているようなもので」、「意識の上ではそれと相互に呼応している」と批判が拡大していくのである。⁽³⁾

そして「延安文芸講話」の文学潮流が国民党支配区へ達した時点で、郭沫若は「抗戦無関係」論者は作家の精神を抗戦から離脱させ、抗戦から超越させようとしている。これはいわゆる非現実主義である、「現実主義のいわゆる『現実』は、題材上の問題ではなく、思想認識と創作手法上の問題である。目の前の題材でも『抗戦無関係』論者が書くならば、非現実となる。歴史上の題材でも正確な意識形態をもって書くならば新しい現実になるのである」と語ったのである。ここに梁実秋の「抗戦無関係」論争は「延安文芸講話」の論理で解釈されることになったのである。

つぎにこの「延安文芸講話」の論理の標的は、最終的に左翼文学同一陣営内の胡風の文芸理論へと向かっていくことになる。それは、胡風の文芸理論が国防文学論争以降、国民党支配地区で理論上成熟しつつ、解放区の文芸理論とは著しく様相を異にしていたからである。またその理論の根底には、「国防文学論争」でのかれらの文学的立場があった。

- (1) 劉炎生、『中国現代文学論争史』、広東人民出版社、広州、一九九九年、四五五頁、四五七頁。
- (2) 巴人、『展開文芸領域中反個人主義闘争（節録）』（『文芸陣地』一九三六年四月十六日）『文学理論史料選』、二八一頁。
- (3) 羅蓀、『抗戦文芸運動鳥瞰』（『文学月報』創刊号、一九四〇年一月十五日）、林志浩、李葆琰編『中国新文芸大系』一九三七—一九四九』評論集』、中華文聯出版公司、北京、一九九八年、三〇頁。
- (4) 郭沫若、『抗戦以来の文芸思潮—紀念—文協』成立五周年』（一九四三年三月十一日）『中国現代文学史参考資料—文学運動史料選 第四冊』、二二三—二三四頁。